

書評

シバ・マリヤム・ジョージ(著)、伊藤るり(監訳)
『女が先に移り住むとき—在米インド人看護師の
トランスナショナルな生活世界—』

東京：有信堂高文社、2011年、313頁、3000円＋税、ISBN978-4-8420-6580-9

関口真理

本書は、Sheba Mariam George, 2005, *When Women Come First: Gender and Class in Transnational Migration*, Berkeley, Los Angeles, London: University of California Press. を原著として、国際社会学、ジェンダー研究の監訳者と社会学専攻の若手研究者たちが共同で全訳したものである。日本版には監訳者による解題が付されている。

インド、ケーララ州出身の女性看護師がアメリカ合衆国に職を得て、移住定着した後に家族や親族を呼び寄せる。インドでの看護学校の卒業生や職場の同僚としてのネットワークも堅固で、先達が保証人となって後輩看護師のさらなるアメリカ到来を促進する。こうして今日のアメリカにはケーララ出身看護師とその家族が構成するコミュニティが形成されている。女性が先に移住し、稼ぎ主となるこの生活空間でジェンダー関係に何が起きるのか、それを考察、分析することが本書の主題である。

著者のジョージは、カリフォルニア大学バークレー校で2001年に、本書の基となった学位論文で社会学博士号を取得し、現在は同じカリフォルニア州のチャールズ・R・ドリュー医科理科大学で専任講師を務める。学位研究を土台として多民族、多文化、マイノリティの視点から米国の医療の世界を社会学の手法で研究している。米国では25パーセントを超える臨床医が諸外国から集まっているとされる。また経済あるいは文化基盤の異なる移民、マイノリティに対する医療のあり方など、ジョージの視点がアメリカ医療に提言できることは重要になっていくと思われる。

ジョージはその母親が看護師としてケーララから米国に渡り、保証人となってインドに残した家族と係累を呼び寄せた当事者である。呼び寄せられたジョージは、インド時代とアメリカ移住後の家族や周囲の変化、母の職場の現状などを実体験した。これが彼女のその後の研究の問題提起になったというわけである。

日本でも「看護婦」が「看護師」に置き換えられ、nurseが女性専従とみなされる時代ではないが、看護師は今も女性にとって手が届きやすく、かつ安定した地位と収入が期待される専門職である。女性たちが先に移住し家族を呼び寄せるという形態は、男性の第一次移民が家族を招くという、移民の国アメリカでも一般的な状況とは違っている。女性の第一次移民では家事労働が知られているが、非熟練労働とみなされ、家族を伴った定住に移行することが難しい。女性の専門職移民の代表格である看護師の中でも、フィリピンを筆頭に、インドと韓国がこれに次ぎ、アジア系の存在が際立っている。女性先導の移民、かつ男性優位なアジア系社会からの移民において、定住保証や定住後の経済力を女性側に依存したこのようなケースは、従来の移民研究では取り上げられることの少なかった例である。監訳者も指摘するところであるが、本書の独自性はこの移民研究とジェンダー研究を交差させたところにある。

インドでは20世紀初期に現地看護師の養成が開始された。不特定の対象との接触を伴うため不浄な職業として忌避されていたが、ケーララのキリスト教徒には、寛容と奉仕の精神から受け入れる余地があった。またインド的背景としては、家族にダウリーを負わせる娘が逆に家族を支える稼ぎ手に転じる存在になるとして、社会的地位や経済力のない家庭が娘の看護師教育を支援した。こうしてケーララのクリスチャン看護師はインドの看護師を象徴するようになった。しかし教育や社会的福利の成功例とされるケーララだが州内経済は脆弱であり、新人看護師の大半は州外の大都市に向かった。さらに1960年代には就業先は中東産油国へと拡大した。女性が多様な職種に進出したことや医療技術の進歩で看護師不足に陥っていたアメリカが、ケーララの看護師たちの新たな行先に加わったのは自然ななりゆきであった。

ジョージは「セントラル・シティ」と名付けたアメリカのある都市にあるインド・シリア正教の聖ジョージ教会をコミュニティへの入口とし、ここの信徒家族たちとそのケーララの親族たちに対して1990年代半ばの2～3年間、継続的なエスノグラフィーを実施した。インド生まれのジョージは同じ宗派に属しマラヤーラム語も堪能で、対象へのアプローチは容易であった。しかし客観性を保つため、自分の家族

を研究対象として持ち出すことを厳格に封印している。

本論は「労働」「家庭」「コミュニティ」「トランスナショナルなつながり」の各章で叙述分析される。聖ジョージ教会の信徒家庭の大半は、妻が看護師で主たる稼ぎ手かつ実質的家長の立場にある。夫たちは移住の保証を妻に負っているうえ、収入や職務内容で希望に見合う職業を得られない。妻の労働を支えるため家事分担を受け入れている。まず「労働」では、看護師を生み送り出すケーララの背景、インド各地と海外に広がる看護師のネットワーク、そしてアメリカの看護労働現場の形成と実態を述べる。さらに妻に合流した男性が、職業と地位でインドと同等には評価されず、経済力で女性の下位に置かれ、「髪結いの亭主」となっていく過程が比較される。「家庭」の章では調査対象を、世帯の移住パターン、労働市場のとの関係、育児の担当を形成要因として世帯形態で類型化する。男性が高い地位にあって女性は家庭を守る（看護師ではない）というインドの伝統的な家族形態が維持されている例と、男性成員が存在せず女性がすべてをコントロールする例が両極となる。看護師家庭は伝統型以外のすべてに存在し、夫は生活存続の根幹である妻の働きをサポートすることを第一に求められる。そこで男性が家事や育児にどのような姿勢で関わるか、家庭や妻に対する考えに変化が起きたか、などが検討される。そして男性のいない家庭を除き、実質的な実権を持ちうる妻が、家庭の円満のために、仕事以外は何も分からないふりをする、家計を夫に丸投げするなど「過剰にジェンダーをする」ことで夫に対し埋め合わせの努力をしていることが明らかになる。「コミュニティ」については後で改めて述べる。

「トランスナショナルなつながり」では、ケーララ在住の親族の移民に対する意識や態度と、アメリカ在住家族のインド訪問体験が検討される。交通と通信手段が飛躍的に発展した現代、移民は故国との頻繁な往来と濃厚な接触を保ち続ける。移民研究は移住先における社会変容のみを扱うものではなく、故郷と移住先との密接なつながりが相互に作用する実態を検討する必要がある。ケーララからの移民も一族の冠婚葬祭のたびに帰省し、結婚市場や子育ての支援を故郷に求める。移民は故郷に経済的支援や新たな移住者への保証を与える。ジョージはトランスナショナルな関係が双方に及ぼすものの重さを指摘する。

ケーララから与えられる偏見や不当な評判の影響があり、それによって妻たちが豊富な情報や頻繁な往来にも関わらず、不特定の患者との接触や夜勤などから「売春婦」呼ばわりされる看護師や、「墮落したアメリカ生まれの不良娘」のレッテルを張られる二世へのイメージは容易には変化せず、女性たちにスティグマとしてつきまとうというのである。

故郷とのつながりの強さが際立つことは、一方で移住先アメリカに対する意識や態度、適応の様子を見えにくくもしている。故国の混乱や迫害を逃れた人々と異なり、インド系移民にはありがちなことだがケーララのコミュニティもアメリカに対しては主に稼ぎと便利さしか求めている。しかしアメリカは、移民に対して国や社会への忠誠や帰属意識を示すことを求める。当該コミュニティが差別や批判の対象にならないうちは構わないのだが、事が起きてから「アメリカ社会」との疎遠さを後悔することになったマイノリティは少なくない。しかし本論の主たる調査対象である第一世代の家族の葛藤の中からは、彼らがアメリカをどのように意識しているのか十分に読み取ることはできなかった。

最後に「コミュニティ」の章に取り上げられた教会生活について触れておきたい。

エスニックな伝統維持に価値を置く移民コミュニティや、宗教がアイデンティティの核をなす集団では、宗教活動やその施設は大きな役割を持っている。ケーララ出身者たちも、アメリカ既存の基督教会に合流するのではなく、アメリカにインド・シリア正教の教会を次々新設してきた。信徒どうしの結びつきは強く、重視される。ケーララに残してきた拡大家族の代用とみなされるからである。女性がジェンダーを演じて男性優位の空間を作る努力をしている家庭以上に、教会では多くの部分でインドの伝統的な価値観と空間が再現されている。男女の席は分けられ、聖体拝領には男性が先にあずかる。信徒数は家族の数でカウントされ、家族の代表は男性（夫）でなければならない。教会運営に関する発言と決定権は男性だけに許される。

教会活動という、コミュニティにとって職場以上に体面の高い場に精力的に関わり確固たる位置を確保することは、家庭と職場で立場の

「下降」を味わった男性たちにとって埋め合わせ以上に大きな意味を持つ。教会における彼らの行動は男性特権の過剰な強化につながり、教会が男たちの縄張りのように囲い込まれていく。そのため、アメリカ生まれの若い世代に伝統的な価値観や文化を与える場と期待され奨励される教会学校や青少年の催しで、女子の参加が排除、制限されるというような根本的な矛盾が発生する。このメカニズムをジョージは非常に深刻に受け止め、本論に先だちこの問題で単独の論文を書いている(本書参考文献参照)。

アメリカのインド系社会の多くが、アイデンティティの拠り所として宗教活動を重視している。人口と経済力のあるヒンドゥー教徒は、アメリカ各地に壮麗な寺院を建立し、大都市の大通りを占拠して祭礼を行う。しかしヒンドゥー教徒の信心の示し方は、個人や家庭によって様々である。冠婚葬祭の根幹はインドの郷里の寺院に頼り、アメリカでは家庭の神棚と儀礼を守ることを第一にしているという例も多い。寺院には行ける機会があれば行く、というのが一般的である。寺院ではインドから僧侶や監督者を招来し、普段は勤めを持ち遠方から来る一般信徒に運営管理に大きな負担を課す必要はない。しかしキリスト教(特に正教会など毎礼拝ごとに聖体拝領を行う宗派)の場合、教区教会に属し、通うことはその社会に生きる大前提で、生活の必須事項である。職場と家庭を妻たちに譲ることを余儀なくされた男たちは、教会を譲れない最後の砦と定め、そこに居座り、「時間つぶし」と揶揄されながらも教会運営を大事な政治のように仕切る。ケーララにおいても十分に家父長的な場である教会だが、アメリカでは男性のジェンダーと権力を確保し確認する砦としてさらに強化されている。彼らにとって教会の重みとそこに生きることの切実さは、職場など何らかの代替えが見いだせるケーララにおける教会のそれを越えているかもしれない。この点が、ケーララ・コミュニティにおける宗教やその施設の役割と重要性は、他のインド系移民社会と異なる特色である。

しかしまたジョージはこの状況を、移民や非西欧社会のジェンダーに対して世間一般だけでなく研究者にも見られるステレオタイプや先入観、偏見に対抗しうる事例として積極的に評価もしている。家父長的社会で男性の欲求不満が、家庭内暴力のような暴力表現ではない形で埋め合わせをすることができる、暴力でない選択肢が存在するとい

うことを示しているからである。

エスニック集団の視点からの移民の経緯と定着の歴史、現状の社会分析、エスニック文学などが知られているが、新しいコミュニティでは移民二世以降が自分のエスニックについての優れた研究を成し遂げ、それによって彼らのエスニシティが「アメリカの一員」であることを実証し、アメリカ社会全体から認知を得るというパターンが確立している（若い研究者にとっては自己アイデンティティの探索という意味合いも含まれる）。第一世代の大半が1970年代以降にアメリカにきたインド系では、第二世代が社会に出ようになった1990年代後半から2000年代がこの時期であった。大学院生が調査協力者を求めてインド系コミュニティ紙に広告を出したり、エスニック・イベントで聞き取り調査を行っているのがよく見られた。本書もまさにその時期に進行していた研究である（ジョージは1.5世だが）。しかし個人が目に見える財力や地位で成功を追求する傾向が強いアメリカのインド系は、学術研究によって「われわれ」を示すという地味な行為に対してそれほど積極的ではなかった。その意味で、インド系移民社会を題材として社会学研究として客観的に高い評価を得たとされる本書は、エポックメイキングな存在と位置づけてよいと思う。

本書の基盤となった調査から今日まで20年近い年月が経過している。この間、特にインドの変化は大きく、インド・アメリカ間の経済状況や情報の格差は小さくなったと思われる。トランスナショナルな交流の実態や、人々が相互に抱く意識に変化はないか、おそらくあるだろう。特に最近のインドの若い世代では、伝統的な価値観やジェンダーに対して意識の変化や新しい動きは見られないだろうか。インドの視点からの移民コミュニティの評価（評判）など、現状のフォローアップがなされたら本書で導かれた考察にも変化が見られるのではないかと気になるところである。

日本でも、外国人看護師の招来が現実のものとなり、受け入れ政策や勤務現場の対応がまさに論議の対象となっている。アメリカの事例を一概に日本に置き換えることはできないが、ケーララ看護師の先立つ実例から学ぶこともまた少なくないと思われる。本書からは研究分

析にとどまらない示唆を読み取ることができるだろう。タイムリーな刊行である。

せきぐち まり ●亜細亜大学ほか非常勤講師